

あやかし狐の身代わり花嫁

シアノ Shiano



アルファポリス文庫

一章

シャン、とどこかで鈴が鳴った気がして私は歩みを止めた。

小さい集落から更に人気ひとけのない方へ向かう細い一本道の手前。夕暮れ時の小道に黒松が暗い影を落としていた。

「小春ちゃん、今帰り？」

話しかけてきたのは手前の集落に住むお静さんだった。

お静さんの背中には半年ほど前に生まれた八重ちゃんがおんぶされている。

八重ちゃんは丸々とした指でどこかを指差し、むにゃむにゃと私には分からない言葉を呟いていた。

私はそんな愛らしい姿に少し微笑んだ。しかしその笑みは長続きしない。

「はい。女学校に手続きに行ってきたんです」

「……そう、学校辞めちゃうんだって？ もったいないねえ……友達と別れるのも寂

しうでしように」

「父が亡くなつては通えせんから……」

「元治げんじさんねえ……本当に急なことで」

——つい先日、父さんの初七日が終わったばかりだった。

神妙な顔をするお静さんに私は軽く頭を下げた。

「先日はお葬式に来てくださってありがとうございます」

「なに水臭いこと言ってるの。それより一人じゃ味気ないでしょ。夕飯食べて行かない？ やかましい家で悪いけどさ」

「ありがとうございます。でも、朝の残りがあるから片付けなさや」

子だくさんのお静さん夫婦は五人の子持ちだ。それに舅しゅうとと姑しゅうとめもいる。きつと賑にぎやかで楽しい夕飯になるのだろうが、急にお邪魔してはきつと迷惑になつてしまう。

私の返答にお静さんは複雑そうに微笑む。

「そうかい。それならもうじきに暗くなるから、急いだ方がいいね。気を付けて帰んなよ」

「うん、ありがとう」

私は会釈えしやくをしてお静さんと別れ、小道を進む。

きつと先程の鈴の音は八重ちゃんの玩具おもちゃか何かの音だろう。

そう思いながら、私は黒松の影を踏んだ。

家に続く小道は鬱蒼うつそうと黒松の生えた林の中に伸びていく。

幹が黒々とした黒松であるせいとか、林の中は日中でもどこことなく薄暗さを感じさせた。それが夕暮れ時なら尚更だ。

——黒松は境目さかいめの木だから、気を付けなさい。

そう教えてくれたのは、今は亡き父だった。

黒松は神様のいる彼方あちらと此方こちらを隔てている木なのだという。

だから、呼ばれても行つてはいけないよ、と。

門松に松竹梅。どちらかと言えば目出度めでたい印象のある松の木に對し、うつすらと恐ろしい気持ちが付き纏まとっているのは、あの時の父さんの言葉のせいだろうか。

夕暮れ時は鬼が出る。逢魔おうまが時とき——そんな言葉も思い出して、私はかぶりを振った。チラリと見上げた西の空は、まるで燃えているかのように赤い。急がなければあつという間に暗くなつてしまふだろう。

私は足を急がせた。家はこの細い一本道の行き止まりに建っている。周囲に他の家

はなく、黒松の林は途切れることなく続いていた。

家の周囲はぐるりと全てが黒松の林で、かまどや風呂を焚く着火剤として燃えやすい松の葉やまつぼっくりを使うことはあったが、拾いに行くのも家の周辺だけ。あまり松林の奥に行かないように、薪にするなら落ちた枝以外手を付けてはならんと、たびたび父さんから言われていたものだ。

数年前、集落から少し離れた由良家にも遅ればせながら電気は通ったけれど、未だに街灯はなく、暗くなれば月明かりのみ。銀座や浅草ならば夜でも街灯が煌々と道を照らしていると聞くが、このあたりはまだまだだ。かつてはそれなりに栄えた宿場町だったこの地には、鉄道こそ走っているものの、中心地から少し離れただけでだいぶ寂れている。

気が付けば赤々としていた夕焼けも消え去り、わずかな残照があるだけだった。家まであと少し。今日は晴れているから、いずれ月が出てくるはずだ。

父さんが生きていた頃は、私が遅くなると玄関先で石油ランプを点けて待っていてくれたものだ。しかし、もう誰も家で待ってはいない。

それを思うと、チクリと胸に刺すような痛みが走る。

母は私が幼い頃に亡くなっていた。そして細工師をしながら、男手一つで育ててく

れた父も、もういない。

じわりと涙が浮かぶのを堪え、私は足を止めた。

袖で目元を拭う。悲しみを誤魔化すように黒松のざらざらとした木肌に触れた。そのまま片手で松の木にもたれ、急ぎ足で上がった息を整える。

——シャン。

鈴の音だろうか。不意に高く澄んだ音がした。

人家もないこんなところに？ それとも集落の子供が忘れていった鈴が木の枝にかけてあるのだろうか。

そう首を傾げた時、頬にポツリと冷たい感触が当たった。

雨だ。そう思う間にも、ポツポツと髪や肌に雨粒が落ちてくる。あつという間に本降りになる音がし、地面には早くも水溜りが出来て雨粒が弾けるように跳ねている。

家まであと少しだが、走ったところで家に着く頃には濡れ鼠だ。

(変なの。ついさっきまで晴れていたはずなのに)

たまたま木の下で立ち止まっていたため、迫り出した松の枝が いい具合に傘の代わりになってくれていた。幾分か細い松の葉の隙間を通して冷たい飛沫が落ちてくるが全身が濡れるほどではない。

それならば、いっそ家まで続くこの松林の中を通り抜けてしまえばいいのでは。今日の着物は一張羅。女学校に通う際によく着ていた着物に袴はかまだった。今後、職を求めるのにも、きつとこの着物を着る機会はいだらう。出来る限り濡らしたくない私にはそれは名案に思えた。

私は松林の奥をそつと窺う。

松林は暗い。けれど今ならまだかろうじて足元が見えるから歩けないこともない。

このまま木の下で立ち止まっても雨がやむ保証はないし、もたもたして真つ暗闇になってしまえばもう松林は通れなくなる。

ここを通るか、それとも濡れるかの二択だ。

私は小さく息を吐いて松林に足を踏み入れた。松の独特の香りが鼻をくすぐる。

松林は途切れることなく家の裏手まで続いていた。道沿いに進めば迷うことはない。足元の根に蹴躓けづかないようにだけ気を付ければいいはずだ。

——シャン、シャン。

また鈴の音だ。

私は、ハッと息を呑む。

松の木の奥に温かみのある光が見えた気がした。

あれは父さんが玄関に灯ともしてくれていた石油ランプ——いや、そんなはずはない。だって父さんは、もうこの世にはいないのだから。

そう思っではいても、足は自然と道沿いから逸れ、ふらりふらりと松林の奥に向かっていた。家ではなく松林の奥へ。

雨粒が松の葉を叩く音と共に鈴の音が一定間隔で聞こえている。

何故かその音を聞いていると、側頭部がじんわりと痺しびれ、足元がふわふわした。

不意に松林が開けた。人がギリギリ二人並んで通れそうな幅の狭い道が現れて、私は目を瞬またたかせる。

（——こんな道、あったかしら）

私はそつと黒松の幹うきに縋る。

鈴の音はだんだんと大きくなり、こちらへ近付いてくる。正体も分からぬそれが恐ろしい。

何かに急せぎ立てられるように、鈴の音が聞こえてくる方と逆に向かった。すると、そこからさらさらとせせらぎが聞こえてくる。川があるのだ。

「あ……ここ、お屋敷のある方だわ」

私は不意に幼い頃のことを思い出した。

幼い頃、それなりにお転婆だった私は、何度か父さんの言いつけを破って、こっそり松林の奥へ探検に行っていたものだ。

薄暗い松林の奥には、そう広くはないが水量の多い川が流れていた。その対岸には大きなお屋敷を囲う、土塀が続いていたはずだ。

背の高い土塀で遮られ外からお屋敷は見えなかったけれど、瓦のついた土塀はとも立派で、幼心にきつとお金持ちの住むお屋敷があるに違いないと思っていた。だから、父さんは松林の奥へ行くことを禁じるのだろう、と。

せせらぎのする方へ向かえば、記憶の通り川が現れ、そこに小さな橋がかかっている。その橋がまた風変わりなのだった。

橋の手前側、それから渡った先に、門が二つあるのだ。おそらくこの屋敷専用の橋なのだろう。

しかし、こんな二重の門では橋を渡るにも、まず手前の門を開けてもらわねばならない。それともお金持ちのお屋敷はどこもこういうややこしい造りなのだろうか。

橋の手前側の門扉にかかった表札には『尾崎』という苗字が刻まれていた。

「……間違いない。尾崎さんの——」

どうやらこの細い道は尾崎家へ向かう道だったらしい。

見ると、今まで一度も開いているところを見たことがない尾崎家の門が——開いていた。

私は、尾崎家の門が見える位置で足を止めた。

シャン、シャンと鳴る鈴の音はやむことなく私の耳に届いている。

音だけではない。遠くにあった光が段々大きくなっていくのが分かった。

何かが、近付いてくる——

私は一際太い松の木の陰に隠れるようにして、その光景を見守っていた。逃げ出したいのに、一体何がやってくるのか見ていたい。そんな相反する気持ちの中心でせめぎ合っている。

「——おや、花嫁殿かい？」

「きゃっ！」

足音もなく、背後から声をかけられて、私は文字通り飛び上がった。

振り返ると狐面をかぶった男が立っていて、私は息を呑む。

狐面だけでも怪しいが、その男は全身がチグハグで違和感しかなかったからだ。紋付袴姿だけれど、立派な着物に不釣り合いなボサボサに伸び切った蓬髪頭。その赤茶けた髪の色と同じ色の大きな尻尾がふさり、ふさりと左右に揺れている。

——狐の尻尾だ。

驚きのあまり腰が抜けそうだ。私は手近な松の木に縋り付いてやつのことで立っていた。

声も出ない私に、狐面の男は首を傾げる。

「ふうむ。その反応、私の花嫁殿ではないようだ。それなら用はない。お嬢さん、もう暗いから早く家にお帰りなさい。これからここに花嫁行列がやってくるんだ。邪魔をしちゃいけないよ」

「は、はい……ごめんなさい」

私はやつとのことでそれを言うのと胸を押さえた。心臓がバクバクと激しい音を立てている。

狐面、そして作り物とは到底思えない狐の尻尾。

——妖だ。

父さんの言っていた通り、黒松の林には入ってはいけなかったのだ。狐の妖に見つかってしまった。

逃げようにも腰は抜けかけ、膝が震えていて一步も動けない。

狐面の男はそんな私を意に介さず、蓬髪を搔いて鈴の音が鳴る方を向いた。

「ああ、いかん。もう来てしまった。いいかい、お嬢さん。花嫁行列が通り過ぎるまで決して音など立てず、静かにしてるんだよ」

男は狐の面の口あたりに人差し指を立てる。

そのまま足音を立てずに松の林から出ると、花嫁を出迎えるように尾崎家の門の前に立った。

(……見逃してもらえたの?)

私は狐面の男の言う通りに息を殺して幹の陰に隠れた。松の木に縋る手が緊張でぶるぶると震えている。鼓動もまだ速い。その時、鈴の音が一際大きく聞こえた。

しとしとと降る雨の中、花嫁行列がやってくる。

狐の嫁入りは雨が降る——私はその言葉を思い出していった。

鬼火——この場合は狐火というのだろうか。火の玉が周囲をいくつも飛んでおり、行列を照らしていた。雨粒が火の玉を反射してキラキラと光っている。

まさにこの世のものとは思えないほど美しい。私は息をするのも忘れて、食い入るように見つめていた。

先頭は神職の白装束の男。鈴の付いた錫杖を持っている。錫杖が地面を突くたび、あたりにシャンと鈴の音が響いた。

その音を聞いていると夢の中のように現実感が失せ、頭が痺れてぼうっとしてくる。足元がふわふわして、立っていることを忘れてしまいそうだ。縄^{すな}り付いた幹のざらつきが手のひらに食い込む。その痛みのおかげで私は意識を飛ばさずにいられた。

錫杖^{しやくじょう}を持つ男の後ろには、闇の中ではんり光る白無垢を着た花嫁の姿。雨の中だというのに長い裾^{すそ}を引き摺り、滑るように進んでいく。

更にその後ろは親族らしき紋付の羽織袴や黒留袖^{くろりゅうそで}の男女がずらりと立ち並び、わずかな乱れもなく行列を構成していた。しかしその花嫁行列の全ての人が狐面をかぶっており、一切表情を窺えない。

不可思議で恐ろしいのに目を離せないほど美しい。

——これが狐の嫁入り。

花嫁行列は門の手前で立ち止まる。

花嫁と花婿——おそらく先程の狐面の男が花婿なのだろう。彼らが向かい合うのが見えた。

さっと合流して尾崎の門をくぐるのだろうか。そこまで見届けたら私も帰ろう。

安堵の心地でそっと息を吐いた。つい気を抜いてしまったのだろう。力の抜けた足元でバキリと硬い音がした。

落ちた小枝を踏みつけた些細^{ささい}な音。

まさか聞こえるはずがない——そう思った次の瞬間、花嫁が振り返り、私の方を見た。

——目が合った。

狐面越しだというのにそんな気がした。

心臓が一際大きく音を立て、背中をどっと汗が流れる。

「——誰じゃ!？」

高い女性の声。花嫁が私の方を指差し、そのまま指をくの字に曲げた。

「出ておいで！」

「ひっ！」

指でくいつと引つ張るような花嫁の動きに合わせて、私の足が勝手に動き出す。

(いやっ、なにこれ……体の自由が利かない)

ギクシャクとした操り人形みたいな動きで、私の体は彼らの前へ引き摺り出されてしまった。

「人間ではないか! せっかくの嫁入りに邪魔が入った!」

花嫁は怒気を漲^{みなぎ}らせ、面越しに私を睨^{にら}む。狐面の角度が変わったからか、面の表

情まで恐ろしいものに見えた。

全身に痙攣のような震えが起こる。

「しかもお前、嫌な匂いがするじゃないか。つい最近、死に触れただろう。ここに穢れを持ち込みよったな！」

その言葉に心臓を冷たい手で掴まれたような気がした。

体が動かない。齒の根が合わないほど震えることしか出来なかった。

「ご、ごめんなさい……」

私は震えながらやつとのこと謝罪の言葉を絞り出した。

死に触れた——おそらくそれは亡くなった父のことを指している。まだ初七日を過ぎたばかり。わざとではないけれど、婚儀という晴れの日に穢れを持ち込んだのは否定出来なかった。

「まあまあ花嫁殿。せっかくのめでたい日ではないですか。そのような通りすがりの娘一人捨て置きましょう。さあさ、屋敷の中へどうぞ」

「うるさいっ！」

狐の花嫁は花婿の取りなしにも落ち着こうとしない。痾癩を起こしたように地団駄を踏み、狐面を外した。同時に綿帽子もはらりと地面に落ちる。

面の下から切れ長の目をした美女の顔が露わになった。しかし髪を乱し、憤怒の表情を浮かべる顔は、まるで般若の面の如し。

「嫌なものは嫌じゃっ！……ああ、ケチが付いた！ そのような結婚など、妾は願い下げじゃ！」

狐の花嫁は私をキッと睨む。

手にしていた狐面を地面に叩きつけるや否や、花嫁行列を構成していた男女が全て青い炎に包まれる。ガシャンツと激しい音がして、持ち手を失った鈴錫杖が地面に落ちた。

めらめらと燃え上がったのは人形をした紙であった。あつという間に燃え尽き、雨の中、薄く煙が立ち昇っている。

この場に残されたのは狐の新郎新婦と私だけになった。

もしや私も同じように焼かれてしまうのでは、という恐怖に青ざめる。この場から逃げ出したいのに、私の体は麻痺したように動かなかった。

「花嫁殿！ どうか落ち着いて」

狐婿は慌てて花嫁に取り縋るが、花嫁はにべもなくその手を振り払った。

「妾は帰る。破談じゃ！」

「待つてくださいよ、そんな……こつちにも都合というものが」

「知らぬ、知らぬっ！」

狐の花嫁はそっぽを向いて、己が髪を一本引き抜いた。

地面にはらりと落ちた髪はするりと馬の形を取る。本物にしか見えない青毛の馬はいななきを上げた。

狐の花嫁がその背にさっと横乗りをすると、馬は颯爽と空へ駆け上がったいく。

「ふん、妾に落ち度はない。悪いのはその人間の娘じゃ！」

空飛ぶ馬に乗った狐嫁はそう言い捨て、袖をはためかせて去っていく。

花嫁が見えなくなると、それまで痺れたように動かなかった体がふっと軽くなり、手足が動くことに気が付いた。

私はゴクリと唾を呑み込み、一目散にその場から駆け出した。

「わあ、ちよっと！」

狐婚がわあわあ言う声が背後から聞こえたが、振り返らなかつた。

走りながら袂をほんの少し引つ張られたような気がしたが、枝に引つ掛けたただけだろう。

暗い松林をしゃにむに走る。何度も躓きそうになるが、足は止めなかつた。枝に

肌を引っ搔かれても、おさげに編んだ髪が絡め取られても走り続ける。今日の履き物がブーツであつたのは幸いだった。草履では林の中をこんなに走れない。

追いつかれてはいけない。私は必死に走った。

突然松林が開け、家に続く一本道へ転がり出た。見覚えのある場所に安堵して、その場に膝をつく。

髪はボサボサで、大事な着物には土が付き、かき裂きもありそうだ。枝に引つ掛けた肌があちこち痛む。

でも、帰つてこられたのだ。荒くなった息を整え、走り過ぎて痛む肺のあたりを押さえた。

そして気が付く。さっきまでの雨が嘘のようにやんでいた。それどころか地面に水溜りはおろか、湿り気すらない。

空には月が昇り、家への小道を照らしていた。

狐の嫁入り——まさに狐に化かされたのか。

私は立ち上がり、家路を急いだ。

月明かりの中、ようやく家が見えてホッとしたのも束の間。

無人のはずの家に明かりがついているのに気が付いて身構えた。私は眉を寄せ、抜き足差し足で近寄った。

そつと玄関の引き戸に耳を近付ける。男女の笑い声が聞こえて、更に眉を寄せた。叔母夫婦だ。

玄関の鍵が開いている。いつの間にか予備の鍵を持っていかれていたらしい。がらりと玄関を開け、土間へ向かう。足元に空の酒瓶が転がっていた。土間にまでむつとした酒臭さが立ち込めている。その酒瓶は、父に供えていたはずのものだった。居間で酒を飲んでいたらしい叔母が、とろりと濁った目をこちらに向けた。

「あーら、随分と遅かったじゃない。あんまり遅いから心配したわあ」

そう言いながらにじり寄り、酒臭い息を吹きかけてくる。私はそれを避けて顔を背けた。

「あの、ちょっと、なんです。人の家に勝手に上がり込んで……」

「アタシらは一人になっちゃった小春を心配してんのよお」

彼女は亡くなった母の妹だ。若い頃、素行の悪い男に引っかけり、親の反対を押し切って駆け落ち同然で出ていったと聞いていた。だが数年前から、たびたび我が家に顔を出しては、父に金を都合してくれと頼みにくるようになっていた。

堅気には思えない派手な着物の衿を抜いた着こなし。唇には濃い紅を付け、酒杯片手にしどけなく座っている姿はまさに女狐という言葉がぴつたりの女だった。
「なーに他人行儀なこと言うとするんじゃ。小春の身内はもうウシらだけなんだから助け合っていこうや」

そう言ったのは叔母の連れ合いである叔父だ。

「だからって、お供えのお酒まで……」

「はは、あんまりにも待たせるものだから、ちょっと一杯、な」

叔父は信楽焼の狸みたいな太鼓腹を抱えてガラガラ笑う。叔母が女狐ならこちらは狸親父だ。叔父の横にも酒の空き瓶が転がっていて、どう考えても一杯どころの話ではない。

「やめてください……鍵も返して！」

夕飯にする予定で炊いておいた煮物の器が空っぽになっている。父さんが作ってくれたちゃぶ台の上が、散々飲み食いした跡で汚れているを見て、湧き上がる怒りに胸を押さえた。

「出てってください。もう貴方たちに渡すお金もありませんから」

「なんじやい、生意気に！ 半人前の小娘がつ！」

叔父は赤ら顔を更に赤くして私を怒鳴りつけた。

怒鳴り声は無条件で恐ろしい。私は首をすくめて身を縮める。

「あーもう、アンタ、やめなつてえ！ 怯えてるじゃないさ」

叔母は酒杯をトンと音を立ててちゃぶ台へ置いた。そして、目を細めて猫撫で声を出す。

「小春う、アタシらはさ、アンタが心配なんだよ。義兄さんも死んじやって、学校だつて続けられないでしょうが。アンタこれからどうするつもりよ」

「……女学校は辞めてきました。どうかして働き口を探します。叔母さんたちに迷惑はかけません」

女工か、それとも給仕か。仕事を選ばなければ働き口はあるはずだ。

父さんの初七日も終わり、手続きの類も概ね済んだ。葬式に来てくれた父の師匠に、仕事の紹介を頼めないか近いうちに相談に行くつもりだった。

「働くつて、ねえ。アンタみたいな世間知らずの子供が？ 笑わせてくれるよ。アタシ、タイピストになりたいのお、とでも言う気かい？」

叔母は自分で自分の言ったことに腹を抱えて笑っている。馬鹿にされた怒りと羞恥にカッと顔が熱くなるのを感じた。

「それになあ、お前の父さんはワシらに借金があるからな。女工やなんかで働いたところで、簡単には返せない額だぞ」

「……そんなんつ、嘘よっ！」

私は愕然として叔父を見た。

無理をして女学校に通わせてくれたのは知っていたが、父との生活は質素そのもので借金の話など一度も出たことがなかった。なにより、真面目で堅実な父が、無闇に借金を作るはずがない。

「嘘なもんか。ワシは偉い弁護士様だぞ。ちゃんとお前の父さんが書いた借用書だつてある。お前は知らんだろうが、元治義兄さんはお前の縁談のためにあちらこちらに金を撒いていたのさ」

「そうそう。アンタにいいところにお嫁に行つてほしいつて、義兄さんの親心じゃないのお」

叔父は弁護士を自称していた。胡散臭いことこの上ない叔父を、父は詐欺師まがいの代言人と言つて嫌つていたことを覚えている。たとえ借金をするにしても、この叔父から借りるはずがない。

しかし見せられた借用書には確かに父の名前が書かれていた。借金の額は一般的な

女工^{じゆうこう}の給料の二十倍以上。これから私が勤めに出たところで到底返せそうにない。

「いいか、これがあるってことは、小春が代わりに金を返さにやらんってことだ。……それで小春や、元治義兄^にさんの葬式で集まった金はどうしたんだね？」

「そうそう。香典がいっぱい集まったんじゃないかと思ってねえ。それを渡してくれたら、ひとまず今日は帰ってあげるわよ。大体、姉さんの着物も地味な柄ばかりで、ろくなのが残ってないしさあ」

その言葉に私の体がブルッと震える。

続きの間の襖^{ふすま}を飛びつくようにして開けると、母の形見の和箆^{わだんす}笥^すを物色した跡が見て取れた。それどころか父が細工^{さいく}の仕事に使っていた道具まで荒らされている。

「な、なんてことを……！ この家から出て行つてよ！」

「おうおう、凄んだところで何も怖くないぞ。香典はどうした」

「……そんなの、もうないに決まってるでしょ！」

いただいた香典はお坊さんへのお布施や、葬式の手伝いに来てくれた近所の人への心付けなどで残っていない。

「ふうん、じゃあアンタ、お妾^{めかけ}になるしかないわねえ」

「え……？」

叔母がニタリと笑う。

「だってアンタじゃ借金を返せつこないでしょうが。このボロ家なんて二束三文にしかなりやしないし。それとも踏み倒す気かい？ そんなことしちゃ、草葉の陰でアンタの父さんが泣くわよお」

「な、そんな親不孝はよくないだろう。……実は、知り合いに妾^{めかけ}を欲しがってるお大尽がいるんだよ。借金はその方が全部返してくれるぞ」

叔父は猫撫で声で言う。

二人が今日来たのは最初からそのつもりだったのだ。心臓が嫌な鼓動を立て始める。「小春は器量もいいし、女学校にも通つていて躰^{しづけ}も行き届いておるだろう。そういうお嬢さんを是非とも側に置きたいってね」

「そうよお、とってもいいお話で。アタシがあと十歳若けりやお妾^{めかけ}になりたいくらいのお人なのよお。すこしお年がいってるけどねえ、だからこそ、ほんの数年我慢するだけだから」

叔父と叔母は顔を見合わせ、わざとらしい笑い声を立てた。そのおぞましさにぞわっと鳥肌が立つ。

「そ、そんなの……」

「月々お金も貰えるし、一等地にある家作をお前にくれるそうだよ。たまーに旦那が来たら相手をするだけさ。どうだい楽なもんだろう」

「でも……私はこの家から出て行きたくないんです」

古い家だが、私が生まれた時から住んでいる。両親の思い出が染み付いた大切な家なのだ。

「なんならさ、代わりにアタシらがこの家に住んであげようか。ちゃーんと管理してあげるわよお」

「そりゃいいな。小春は借金がなくなるし、生活の憂いもない。旦那もいい妾を持って大喜び、ワシらも家賃が浮いて万々歳だ。三方良しで、いいことづくめだろう」

「い、嫌っ！ お金は……なんとかしますから」

私は首を横に振って言った。誰とも知れない男の妾になどなりたくもない。

だが叔父は返事の代わりにちゃぶ台をバンと叩く。

その激しい音に心臓が縮み上がり、両腕で庇うように胸を押さえた。叔母は黙って冷めた目をして私を見ている。

「まだ分かってねえのかっ！ お前じゃ金を返せっこねえだろうが！ ……花街の娼妓にでもなるってんなら話は別だが」

「このあたりなら千住遊郭が近いかしらねえ。別に、そっちのがいいってんならアタシらはねえ？」

「ああ、そうとも。妾の方が楽だったって思い知るだけさ。どっちも嫌、で逃げられる話じゃないって分かってんだろなあ？ 他に手があるなら一応聞くだけ聞いてやろうじゃないか、おい」

「——いやいや、お待ちを。旦那さんに奥さん。ちよいと私の話を聞いちゃくれませんかね？」

シャン、とどこからか鈴の音がして私は息を呑んだ。

「だ、誰……？」

叔父ではない男の声。

私は目を瞬かせながら声のした玄関へ視線を向ける。

玄関扉が開いた音はしなかったはずなのに、男がひよっこりと三和土に立っていた。紋付袴、ボサボサの蓬髪。そして狐の面と尻尾——尾崎の家の前で会った、あの妖の男だった。

「嘘……どうして、ここに……」

せつかく家まで逃げたのに、追いつかれてしまった。私は恐ろしさのあまりその場

に座り込んだ。

「いやあ、すみません。実は、袂たもとにね」

そう言いながら男が己の袂たもとを指差した。

それを見て慌てて自分の着物の袂たもとを探れば、一体いつ入れられたのか、鈴がコロリと転がり出てくる。おそらくは、さっきの花嫁行列で使っていた鈴錫杖しやうしやうの鈴だ。

「……え、どうして」

「お嬢さんが逃げてしまうから、ちよいとね」

狐面の男は飄々ひょうひょうとそんなことを言った。

私はどう反応すればいいか分からず、手のひらの鈴を握りしめる。手の中で鈴が小さくチリリと鳴った。

「おい、なんじゃお前は。勝手に人ん家に入りよって」

「そうよお。どこのお大尽だか知りませんがねえ、今は取り込み中なんですよ」

叔母夫婦は迷惑めいわくそうな素振りを隠そうともしない。けれど、ボサボサの髪も狐面もこれ以上ないほど怪しげだというのに、そこには何一つ触れない。まるで二人には、この男がごく普通の人間に見えているかのようだ。

おかしいのは私の方なのだろうか。私はすっかり混乱していた。

男は如何いかにも困ったように腕組みをした。面をかぶっていることもあり、芝居がかった動きに見える。

「実は、困ったことがあります……。ああ、申し遅れました。私はこの松林の奥にある屋敷に住んでおります、尾崎と申します」

「誰がお前の名前なんぞ聞いてるんじや！」

「ちよっと、アンタ、少し黙って——尾崎さん……いえ、尾崎様とおっしゃいましたねえ？ お屋敷つてあの、林の奥に土塀が見える、あそこの？」

「ええ、ご存じでしたか。その屋敷の者ですよ」

叔母の目がキラリと光り、獲物を狙う猫——いや狐みたいになった。

「まあまあ、それで、今日はこういったご用件ですの？ アタシでよければお力になりますよお」

叔母には尾崎が金満家きんまんかにでも見えているのか、急によそ行きの顔でシナを作る。あの松林の奥に大きなお屋敷があることを知っていたらしい。

「それはそれは、助かります。実は女中を探しているのです。急ぎでして、とにかくすぐにでも屋敷に来ていただきたい。それというのも、本日結婚をしたのですが、妻が連れてくるはずだった女中が急に都合が悪くなりまして」

尾崎はペラペラと話し始めた。叔母はうんうんと真剣に頷いているが、それにしてもよく舌が動くものだと思ってしまう。

「結婚したばかりの、それはそれは可愛い新妻です。家事の苦勞など一切させる気はございません！ ですがどうにも手が足りんのです。とにかく広いばかりの屋敷でございまして、このままでは掃除も行き届かない。そんな環境に可愛い新妻を置いておけるはずございませんでしょう。そういうわけで早急に掃除が出来る女中が欲しいんですね。そんな折、たまたま屋敷の近くで、お可哀想に最近お父上を亡くされたお嬢さんがいらつしゃると小耳に挟んだものですから、もしよろしければしばらくの間お預かりできないものかと、まあそう思っただけです、はい」

「あらまあ、そうです。でも、この子にはいいご縁がございまして、先が決まっております。ですが……どうしてもとおっしゃるなら、それ相応のモノが必要でございましょう？」

叔母はにんまりと笑う。

叔父も合点がいったように太鼓腹をポンと叩き、手を揉んだ。

「ええ、ええ。そうですとも。この小春はとても氣立てのいい娘です。女学校出で学もありますし、器量もこの通り。磨けばよく光ること間違ひございません。私共が

親代わりでございましてねえ」

「な、何が親代わりよ」

叔父の言葉を否定しようとしたが、叔母にべしんと叩かれる。

「馬鹿っ、黙ってなさい！ あんなお屋敷の持ち主よ。お金持ちに決まってるじゃないさ！」

叔母は小声でそう言い、私を居間の隅まで引き摺り、耳元で囁いた。

「フン、結婚したばかりだったのに助平な男だよ。あれはね、女中という名の妾奉公を求めているんだ。奥様公認のお妾めかけつてことだよ。奥様が不美人かそれとも不仲なのかは知らないけどねえ」

「で、でも……」

「でもじゃないわよ！ せめて若い方がアンタだっていいじゃないさ！ 奥様より早く跡継ぎを産んじまえば、屋敷で大きな顔が出来るわよお」

私は欲深い叔母に閉口した。

そもそも私には、その男はどう見ても狐の妖あやかしに見える。しかも先程、私の目の前で花嫁に逃げられているのだ。男の言っていることの意味がまったく分からず、混乱するしかない。

しかしその間も、叔父と尾崎の話は続いている。

「実は小春には先にお約束がございまして。それを反故はこにして尾崎様の家に小春をやるとなると、それなりにかかるものがございます。元々小春の父親の借金を私が肩代わりしているもので……」

「はあ、なるほど。支度金だけでなく返済金に違約金も必要と、そういうわけですね」

その通りと示すように叔父はにんまり笑いながら揉み手をしている。

「分かりました。手持ちの紙幣で足りるでしょうか」

尾崎はそう言うや否や、袂たもとからごつそりと束を取り出して床へバラバラと撒まいた。

それを見た叔父は床に目が釘付けである。私を押さえる叔母も、横で息を呑んだのが聞こえた。

「ああ、ちよいと古いですが小判でもよろしいですか？ それならもーつとありますよ」

更に袂たもとを探り、取り出したそれも床に撒まく。床でぶつかり合い、カチャンカチャンと硬い音を立てた。

「まああ……き、金じゃないの……」

「はい。見ての通り本物の小判でございます」

「い、いやいや、まず本物の金かどうか。齧かじれば分かんと言いますが……ちよつと失敬。ああ、本物だ！ ほれ、見てみる、嚙かじんだ跡が付いただらう！」

「ほ、本物よお！」

叔母夫婦は顔を見合わせ喜色満面だ。

「え……でも、それ……」

言いかけた私に、尾崎は黙って狐面の口に人差し指を立てて見せる。私はおずおずと頷いた。

叔父も叔母も、すっかり金に目が眩くらんだ顔で笑っている。

——しかし私には、彼らが床に這はいつくばって集めた紙幣は木の葉に、本物の金かどうか齧かじって確かめていた小判は瓦のかけらにしか見えなかった。もちろん菌形など付くはずもないのに、叔父はうつとりと瓦を撫でている。

私は目を瞬またたかせて怪しげな狐面の男を見上げた。今気が付いたが、かなり上背がある。声の感じや、首や手のひらを見る限り、父さんよりずっと若そうだ。しかし妖あやかしだとすれば見た目通りの年齢であるはずもない。

「さて、これで足りますでしょうか？ 私としましては、この小春さんの育ての親と

のことで礼を尽くしているつもりですが」

「ま、まあ……これだけあれば……なあ？」

「ええ、アタシらは文句の付けようもございませんわあ」

「そうですか。それはよかったです。それで、もしよろしければ、小春さんと少しお話しさせてもらえませんか？ 出来れば二人きりで」

叔父と叔母は顔を見合わせてニタリと笑う。

「ええ、どうぞ。……ごゆっくり」

ごゆっくり、の部分に力を込め、叔母夫婦はいそいそと荷物をまとめる。

「ああ、借用書は置いていってくださいね」

「か、鍵も！ それから母さんの着物も返して！」

叔父から借用書を、そして叔母から鍵と、ちゃっかり持ち去ろうとしていた亡き母の着物を取り返す。

「はいはい。アンタも目敏いねえ」

叔母は大金を手にして気が大きくなっているらしく、緩み切った顔で大人しく返してくれた。

叔母たちが去り、取り戻した母の形見の着物を抱きかかえてホッと息を吐く。

けれどこれで済んだはずもない。

私は顔を上げ、何を考えているのかまったく読めない狐面を見つめた。

「あ、あの……どうして助けてくれたんですか」

私はおすおすと尋ねた。

私は狐の嫁入りを邪魔してしまったのだ。責められこそすれ、助けられるとも思ってもみなかった。

「へえ、助けられたんですか？」

しかし尾崎はとぼけた態度でそう言い、大袈裟な動きで首を傾げる。

「だって私、あの人たちに借金のカタで妾として売り払われるところだったんですよ」

「あれまあ、そうだったんですか。じゃあ、お嬢さんは、今は私のものつてことですよね」

「えっ……!？」

狐の面からは尾崎の表情が分からないはずなのに、何故だかニンマリと笑っているみたいに思えた。

「ほら、これ。さっきあの人たちから買い取った紙切れ」

尾崎はヒラヒラと借用书を振って見せる。

「た、助けてくれたんじゃないの……？」

「そりゃ、人間だってタダで人助けをしたりしないでしょ。結局、私が借金を支払ったようなものですし」

「で、でも叔母さんたちに渡したのは偽物のお金でしたよね？ 私には木の葉と瓦のかげらに見えました」

そう言う私に、尾崎はふふと含み笑いをする。

「お嬢さん、やっぱり勘がいいねえ。それとも目がいいのかな。とはいえ、私が買い取ったのは事実でしょう。力尽くで奪ったわけではないですし、あの人たちも喜んで渡してくれましたよ」

「そんなの屁理屈だわ！」

「屁理屈で結構。そんなことより、私は困ってるんですよ。なにせお嬢さんのせいで花嫁に逃げられてしまったんですから」

私は気まずさを感じて目を逸らす。

「た、確かに……それは……」

わざとではないとはいえ、花嫁が怒ったのは私が嫁入りを邪魔してしまったせいな

のは確かだ。

「実は私、どうしても早急に嫁を得なければならぬですよ」

「はあ……」

「三ヶ月後の親族会議に嫁を連れて行くと約束して……もうね、海千山千の古妖こようばかりの会議です。私なんてあの中じや尻の青い若造扱いでねえ……。それでお嬢さん、代わりに私の花嫁になってくれませんかね？」

「えっ!？」

私はその言葉に弾かれたように顔を上げた。

「いやっ、無理っ、無理です！」

ブンブンとおさがが空を切る勢いで首を横に振った。いくら禁忌きんきを破って禁足地に入った自分のせいとはいえ、見ず知らずの、しかも妖まがしに嫁ぐだなんて。

しかし尾崎は身を小さくして拝み倒してくる。妖まがしのくせに随分と腰の低い男だ。

「どうかこの通り！ お願いますよお。ほんの少しの間でいいですよ！」

「……ほ、ほんの少し？」

「はい。言ったでしょう。親族会議があるって。そこで花嫁のフリをしていただきましたいのです」

「本物の花嫁じゃなくて、フリだけ？」

「はい、フリだけです」

私は少し考え込む。妖の花嫁はごめんだが、花嫁のフリをするだけならば、さっきの詫びにもなるだろう。何より、尾崎のおかげで叔母夫婦に妾として売り払われずに済んだのは事実だ。それに、あの欲深い叔父や叔母が這いつくばって木の葉や瓦を拾い集める姿には、少しスッキリした。

「それにタダでは言いません。この紙だけでなく、お金でも小判でも……」

「いえ、それはいらないです。さっきみたいに木の葉と瓦のかけらかもしれないですもん」

私の言葉に尾崎は蓬髪をバリバリと掻き、声を上げて笑った。

「はは、確かに。では何か欲しい物はありますか？ 私に用意できる物なら用意します。まあそれも偽物だろうと言われてしまえばそれまでですが……」

「欲しい物……」

私は首を傾げた。

両親を安らかに眠らせる墓が欲しい。しかし、はいどうぞ、と墓石を渡されても困る。

少し考えてから思い付く。

「欲しい物とは少し違うんですけど、叔父と叔母がまた戻って来たら困ります。もしかしたら、さっきのお金が偽物だって気付いて乗り込んでくるかもしれません。あの人たち、鍵がなきゃ、次は扉を壊しそうだから心配で」

「なるほど。うーん、じゃあ、この松林にあの人らが入れないようにしましょうか。ほら、よくあるじゃないですか。一本道なのに何やら同じところをぐるぐるって。

私は狐ですから、そういうの得意なんですよ」

「あの、貴方は本当に狐の妖なんですか？」

私は尾崎のふさふさと揺れる赤茶色の尻尾を見て言う。普通の人間には思えないけれど、こうしてちゃんと会話が出来る。子供の頃に寝物語で聞かされていた怖い妖の話とは随分違うみたいだ。

「はい。私は狐ですよ。尻尾もほらこの通り。ですけどね、本当であれば私の尻尾は五本で、もつと強い力を持っていたんです。それがどうしたとか、今は一本しかないですよ。よよよ……」

どう見ても泣いているようには見えない。白々しい泣き声を上げて尾崎は狐面の目元を袖で押さえた。

「尻尾しっぽって……増えたり減ったりするものなんですか？」

「ええ、そうですね。力のある狐……九尾しっぽの狐ってご存じないですか？ 妖あやは、ながしく生きれば生きるほど力を増していくのです。尻尾しっぽも力と共に増えます。ま、その逆に、尻尾しっぽを失えば力も失いますが」

「ふうん、やっぱり人とは違うのね……」

「はい。妖あやは人よりずっと長い時を生きています。この家も元は時川ときがわさんって爺さんの家でした。時川の爺さんはここに住む時、私と約束をしたのです。この松林の番人になるってね。ですが気が付けば、時川の爺さんは死んでしまい、お嬢さんのご両親が縁あってここに住み始めた」

「……確か、私が生まれる少し前に、父が師匠の知り合いから買ったそうです。ちよっと不便なところにあるけど、父は細工師さいくしだったので、毎日勤めに出るわけではありませんから」

狐面が傾く。尾崎が首を傾げたのだ。彼は少し考え込んでから言った。

「そういえば、かれこれ二十年近く前、お嬢さんによく似た声を聞いた気がします。うちの屋敷の前でなにやら声を張り上げていたような……もしかしたら、お嬢さんのお母様だったのかもしれないねえ」

「そうかもしれません。とはいえ、母が亡くなったのは私がまだ小さい頃なので、声は覚えてないんですが」

もしかしたら、母も松林で妖あやを見たことがあったのだろうか。父が松林の奥に行っではならないと言ったのは、そのせいだったのかもしれない。

「分かりました。尾崎さん……でいいでしたよね。フリだけでもね。私、身代わりの花嫁になります！」

「いやあ、ありがたい！」

尾崎はそう声を張り上げると私の手を握った。

「では、早速参りましょう。ああ、着物なんかはこちらで用意いたしますから、手ぶらで結構ですよ。この家には、お嬢さん以外誰も入れないよう結界を敷いておきましようね」

「ちょ、ちよっと待って！ 三ヶ月後の親族会議で花嫁のフリをするだけじゃなかったの!？」

「いやいや、まさか！ 言ったでしょう、海千山千の古妖こようですよ。突然会議に連れてきた花嫁なんてすぐに偽りとバレてしまいます。それに、いつ親戚の古狐が屋敷に様子を見にくるかも分かりませんし。ああ、身代わりの花嫁以前に、貴方が人間である

ことはもちろんバレてはいけませんよ。私の屋敷にも、妖あやかしの奉公人からよく分からない居候いそうこうまでうじやうじやウロウロしていますから、お氣を付けて。貴方だつて人間とバレて、頭から鬻かられたくはないでしょう?」

「そ、そんな……待って、やっぱり、私……!」

「ふふ、もう約束しましたからねえ。古今東西、妖あやかしとの約束を破つてよかつた試しはないですよ。いやあよかった! 貴方もほんの少し、たつた三ヶ月だけ我慢をするだけでしょ?」

尾崎はまたヒラヒラと借借書を私に向かつて振つて見せる。

その狐面の憎らしいことといったら。

一難去つてまた一難。その言葉が身に沁みた私は、尾崎に握られた手を振り払うことさえ出来なかつた。

「こんにちは。花嫁様、妖屋敷にようこそ」

尾崎は芝居がかった言い回しで私の手を引いて松林を歩く。逃がさないためなのか、その手を離そうとはしない。

しかし、暗闇の中、ぐいぐいと手を引っ張られていても、不思議と松の根に躓つまずく

ことはなかつた。

我が由良家から尾崎の屋敷まで高々数分。その時間で心の準備が出来るはずもない。妖あやかしがたくさんいる場所で三ヶ月も過すごすだなんて、とにかく不安でならなかつた。

私は歩きながら尾崎に尋ねた。

「あの……私、人間ってバレたらいけないんですよね?」

「そうですよ。妖あやかしにもよりますが、人が好きで人に交まじつて暮らす者がいれば、人が嫌いで虎視眈々こしたんたんと命を狙う者、食べ物として見る者もありますね。屋敷には色々住み着いておりますから、さてさてどれがどれやら……」

「そんなの無責任じゃないですか! 私はただの人間です。あの花嫁の狐だつて、私をすぐに人間だつて見破つたのに」

「確かにそうですね。せつかく連れ帰つたのに、すぐに鬻かられてはたまりません」

尾崎は足を止め、ううんと唸る。

その氣の抜けた声は、私を守る氣がなさそうに聞こえて更に不安が募る。

「とりあえず化け狐と化け狸の親戚つてことにしましょうか。ほらさっきの二人、まさにそんな感じだったでしょう」

私もそれには同意見だったので、そんな場合じゃないはずなのにクスツと笑いが漏

れた。

「本物の狐の妖あやかしから見てもそう見えます?」

「ええ。欲深が人の皮をかぶっているようにしか見えませんでした。妖だつてねえ、心根の綺麗な人間の方が好きに決まっています。ま、それとは別に悪い奴なら食あやかしっていないなんて考える妖もおりますけれど」

そうか狐か、と尾崎がぼそりと呟く。

「お嬢さん、これを」

尾崎は袂たもとを探って鈴を一つ取り出した。

尾崎の袂たもとには色々な物が入っているらしい。

「その鈴、さっきの……?」

「ええ。お嬢さんの家まで私を案内してくれた鈴です。こいつは、元はお燐狐さんぎつねの持ち物ですからね。狐の妖氣が染み付いています」

お燐狐とは、逃げた狐の花嫁の名前だろうか。鈴を手渡された私はマジマジと見つめる。

「これをどうすれば?」

「飲んでください」

「ええっ!」

私は驚き、再度鈴を見た。私の親指の爪より少し大きい。しかも金属製の。そんなものを飲み込んだら喉に詰まってしまいそうだな。

「無理です!」

「でもこいつを飲んでくれば大体の問題は解決しますよ?」

「この大ききじや物理的に厳しいですし……何より妖の道具あやかしなんて飲めません!」

飲み込んだら、一体どうなることか。そんな恐ろしいことはごめんだった。

私は半ば押し付けるように尾崎に鈴を返す。

「大丈夫、こいつはそこそこ古いけど、まだ付喪神つくもがみになるほどじゃありません。飲んだところで、たまーにお腹の中で鳴るくらいでしょう」

鈴は尾崎の手のひらの上で勝手にシャンと音を立てた。まるで意思があつて返事をしたみたいではないか。

「大丈夫じゃありません! 氣味が悪い!」

「うーん困りましたねえ……」

まったくもって困ってなさそうな声色で、尾崎は肩をすくめた。

「お嬢さん、ちょっとごめんなさいよ。ほんの少しだけ辛抱しててくださいな」

「だから、い——」

嫌だと言う途中、突然私の喉が凍りついた。

喉だけではない。体も動かせない。それは狐の嫁入りを邪魔してしまった時と同じだった。体の自由がどこかに行ってしまったかのようだ。

動かせるのは視線のみで、尾崎を睨むことすら出来ない。

「まあ、ちょこつと乱暴なやり方ですけどね。でも、もういい加減、嫁を連れ帰らねば屋敷の者に怪しまれますし」

尾崎はそう言いながら狐面に手をかけ、少し上にずらした。狐面で隠れていた鼻と口が露わになる。

（なんだ、ちゃんと顔があるんじゃない）

なんとなく、あの狐面の下はのつぺらぼうかもしれないと思っていた私は、拍子抜けした。

すつと通った鼻筋に形のいい唇。ボサボサの蓬髪を見なければ、鼻から下は男前と言えるかもしれない。上半分が見えないから正しい判断は出来ないが。

つい露わになった狐面の下の顔に意識が向いてしまって、尾崎のしようとしていることに気付くのが遅れた。

尾崎は私の顎をわずかに持ち上げ、唇を開かせた。体が動かないから尾崎の思うままだ。無理矢理唇を飲ませる気だと悟った時には、全てが遅かった。

尾崎は己の舌を出して唇を載せると、パクリと口に含んだ。

そのまま彼の顔が近付いてくる。何をするつもりなのか、問わなくても分かった。

（やめてっ——！）

拒絶の言葉は声にならない。

おでこに狐面がこつりとぶつかる。

まったく動かない唇に尾崎の唇が触れた。

——口付けられてしまった。

しかもそれだけに止まることなく、触れ合った唇の合間から、何か金臭い味のある液体が流れ込んでくるのではないか。

「はい、ごつくん」

尾崎は唇を離し、小さい子供に薬を飲ませるみたいに、私の喉を軽く撫でる。

口の中に液体が溜まったせいかわ、それとも尾崎が喉だけ動かしたのか。

——ごくん。

私は口の中の液体を飲み込んでしまった。

妖^{あやかし}から口移しで与えられたわけの分からない液体を。

口付けをされた衝撃と合わせて、頭が真っ白になっていく。

「いやあっ!!」

無我夢中で、目の前の尾崎を突き飛ばす。

しかし、直前でひょいっと尾崎にその手を避けられ、私はその場に尻餅をついてしまった。

いつの間にか、体が動くようになっていた。でも、なんにも嬉しくない。袖^{そで}でゴシゴシと口を拭う。

「ひどいっ！　なんてことをするのよっ！」

「そんな。私はお嬢さんのためを思っ」

尾崎はともてそうは思っていないような声色で言った。

「だって大きくて飲み込めないって言うから、わざわざ鈴を液体にしたんですよ。」

ちゃんとお腹の中に入ってから、固体に戻るようになって。それもこれもお嬢さんの体に負担をかけないためにしたことです」

「だ、だからって……！」

「三ヶ月後の親族会議が終わったら取り出してあげましょう！　鈴が教えてくれるか

ら、それまではどうせ逃げられませんか」

私のお腹の中でシャンと鈴が鳴る。慌ててお腹を押さえた。

本当に体の中に妖^{あやかし}の鈴を入れられてしまったのだ。顔からさあっと血の気が引いていく。

「もう嫌あつ！　どうして私がこんな目に！」

高ぶる感情に任せて大声を上げた。

もう泣きたい。

「そりゃあ、禁足地に足を踏み入れてしまった自分のせいでしょう」

「黙っててよ！　そんなの私にだって分かってるわよっ！」

だからといって感情を我慢出来るものでもない。

「……そんなに嫌だったんですか？」

「嫌に決まってるじゃない！」

「でも、その鈴はお嬢さんのことを気に入ってるみたいですよ」

また一つ、お腹の中でシャンと音が鳴る。

「きつと、お嬢さんを助けてくれると思いますけどね。魍魅魍魎^{ちみもうりょう}の巣^すみたいなどころに行くわけですし、味方は多い方がいいですよ」

「うるさいっ！」

私は頭にカツと血が昇り、すぐ側に落ちている松ぼっくりを拾って投げた。ちょうど狐面の位置を直していた尾崎の、その狐の鼻っ面(づも)に松ぼっくりが当たり、ポコンといい音がする。

「あ痛ッ！」

尾崎はしゃがみ込んで狐面を押さえた。

そこまで痛いはずはないだろうが、ほんの少しだけ私の溜飲(りゅういん)が下がった。

気を取り直して私たちは尾崎の屋敷の近くまでやって来た。

いや、それでも気が重いことには変わりない。そつと鈴の入ったお腹を撫でる。身動きをしても音が鳴ることがないのは不幸中の幸いだった。そもそもお腹の中だというのに振って鳴らすのと同じ音が出るのだから、見た目通りの鈴ではなく、あくまで特別な妖(まじな)の鈴ということなのだろう。

「それじゃあお嬢さん……いや、ここからは小春さんと呼ばせてもらいますね」

「はあ……」

「やはり鈴を飲んだからでしょう。小春さんからわずかに妖気を感じるようになりますま

した。これでまあ人間と見破られる確率も減ったことでしょう」

私にはさっぱり分からないが、尾崎がそう言うのなら効果はあったのかもしれない。松林がぼつかりと開き、二つの門に挟まれた不思議な橋が現れる。

「さて、ここから先はいつバレてもおかしくありません。今のうちに少し話をすり合わせておきましょう。まず、私のことを尾崎さんと呼ぶのはやめましょう」

「じゃあなんと呼べば？」

「私には、尾崎玄湖(くろこ)って名前がごいます」

尾崎——いや玄湖はそう言いながら己の狐面を指差した。

「分かりました。では、玄湖さんで」

どうせ逆らったところで鈴を取り出してもうまでは逃げられない。これではまるで首に鈴を付けられた猫だ。うんざりした気分です息を吐く。

「ああ、夫婦になるとはいえ、褥(しとね)を共にすることはありませんからご安心を。それでもたまには夫婦に見えるよう振る舞ってもらいます」

「はい」

三つ指でも付いて出迎えればよいのだろうか。妖(まじな)の作法などまったく分からない。洪々ながらそう返事をした。